

# 現代日本の都市伝説における カニバリズムの浮揚

嶋 島 直

キーワード：カニバリズム（食人）、都市伝説、ネットロア、食品

## はじめに

最近の日本の都市伝説に、カニバリズム（cannibalism）すなわち食人の要素を含むものが少なからず認められるようになった。特に頻繁に耳にするのが、「某ハンバーガーショップのハンバーガーに人肉が使用されている」、そして「不口家のペコちゃんが舌を出しているのは母親を食べ、その血を舐めている」といったものである。100%ビーフのはずのハンバーガーパテをめぐるのは、猫・犬・鼠・ミミズとさまざまな都市伝説が語られてきたが、21世紀に入り、人肉説が囁かれ、時をほぼ同じくしてペコちゃんによる近親カニバリズムが語られ始めた。本稿では、これら2話とそれぞれの類話、そして、同じくカニバリズムの要素が認められるその他の都市伝説や関連する事件を取り上げる。そして、文化人類学におけるカニバリズムの類型論、また、伝統的な口承文芸や創作作品が描く、あるいは暗示するカニバリズムとを対比させながら、現代日本の都市伝説におけるカニバリズムの浮揚とその背景について考察を加えたい。

筆者は、愛知県の愛知学院大学文学部日本文化学科にて日本民俗学の概論を担当しているが、講義内で、例年、受講者が知っている食品に関する都市伝説の事例を小さな課題として提供してもらい、講義の資料として活用してきた。以下紹介する情報は、その過程で得られたものと、2021年4月下旬から5月上旬にかけて、ゼミの学生や卒業生、その他の知人たちからの聞き取り等によって得られたものである。なお、店名等の伏字は○か□で示すが、○は回答者自身、□は筆者によるものである。

## 1. 多彩なハンバーガー素材

人肉が使用されると噂されているのは「100%ビーフ」を謳い、かつ業界を代表するM社に関するものに集中している。同社の日本上陸は1971年であったが、間もなく、猫の肉を使用しているとの噂が語られる。1979年か1980年、当時高校生であったHB

さん（男性）は、名古屋市内のM社店舗でアルバイトをしていたが、同級生から「マクロナルドが猫を使用している」という噂を聞き、それを訂正した記憶があるとのこと。猫肉使用説は間もなく犬肉説に取って変わられる。筆者自身の記憶では、1980年前後、東京都内の家庭教師先の小学生等から、犬の肉が保健所との結託のもと安定供給されているとの噂を耳にしている。本家アメリカでは1978年から1982年にかけてミミズ使用説が語られるが〔カプフェレ 1988：111, ブルンヴァン 1988：139〕、日本でも1980年代にはミミズ説が語られ始める。STさん（1967年生まれの男性）は1980年か1981年に京都府八幡市の中学校で同級生からミミズ説を聞いており、MSさん（男性1979年生まれ）は名古屋市内の小学校で1980年代後半ミミズ使用との噂を聞いている。こうして犬説は1980年中頃にほとんど消え去り、1990年代はミミズ説にほぼ独占されながら、ネズミ説も登場し、特に2010年前後に頻繁に語られたようである。以上は、おおその推移であり、伝承や情報には地域差や個人差があり、複数ヴァージョンの併行も多々存在することに注意が必要である<sup>1)</sup>。

1980年代生まれまでの人たちの記憶では、イヌ、ネコ、ミミズ、ネズミの4種にほぼ限られていたが、1990年代生まれになると、噂の対象は急拡大する。筆者がこれまで都市伝説上で確認したM社のパテ素材を、「入っている」「混ぜている」を含め、聞き取った年代順に列挙すると次のようになる。（ ）内の数字は、2年生を中心とする大学生たちからの情報の初入手年度である。

イヌ、ネコ、ミミズ、ネズミ、ヒト（2004）、コアラ（2013）、カンガルー（2013）、ヌートリア（2013）、カエル（2013）、牛の骨や内臓なんかざくざくにしたもの（2013）、段ボール（2013）、ゾンビ（2015）、ウサギ（2016）、ウマ（2016）、牛の目玉（2020）

最後のゾンビを「ヒト」に含めることにして13種、段ボールは非生物ではあるが、小動物園が成立しそうである。さらに、1995年か1996年生まれと思われるある学生からは、ネズミやミミズ、人肉等に加え、「病死した動物の肉」との情報（後述の⑥）が加わった。種が不明であるので、素材数は膨大に拡大しうることになる。なお、初期は別として、同時期に複数素材が語られる傾向が年を追うごとに増しているようである。

ところで、ヌートリアの例は、「マ○クの肉は牛ではなくヌートリアの肉である。肉の中からヌートリアをしとめる玉がでてきた」という内容であるが、1993年か1994年生まれと思われる回答者のMMさんは「『都市の穴』という本で知りました」と付記している<sup>2)</sup>。同書は2001年に刊行され、2003年に文庫化された都市伝説集であるが、冒頭には「どうか、読んだ後は、友人たちに語り継ぐことに熱中していただければと願う」とある〔木原・市ヶ谷・岡島 2001：3〕。現在の都市伝説は口承とは限らない。図

書雑誌を介した書承あるいはマスメディアやインターネットを介した伝承すなわちネットロアも伝えられ、それらがさらに口承されることも普通になりつつある。

## 2. 人肉バーガー譚の登場

筆者が、人肉説に初めて接したのは、大学生の回想としてミミズ説を聞くことが圧倒的に多かった2004年の講義においてである。1984年と1985年生まれを中心とする34名からの回答中、犬や猫は皆無で、ミミズ8（「食用ミミズ」1を含む）、ネズミ3を数えたが、①「マクドナルドのハンバーグは人肉で出来ている」という事例を1人の女子学生から得ることになった。

その後しばらく人肉説を聞くことはなかったが、2013年度の講義時に、76名からの回答中つぎの4例を確認することになった。

- ②「マ○ドナルドのハンバーガーの肉は人の肉を使用している」（2012年入学の女子）
- ③「マク□ナルドでは牛100%のハンバーガーではなく人肉を使ったハンバーガーを出している」（2012年入学の男子）
- ④「マクド○ルドのハンバーガーに使われてる肉には人肉が混じっている」（2012年入学の女子）
- ⑤「マ○ドナルドの肉には人肉が使われている」（2012年入学の女子）

回答者はいずれも1993年か1994年生まれと考えられる大学2年生であった。なお、2年後の2015年の講義においては、1995年か1996年生まれと思われる女子学生から次のような情報を得ている。

- ⑥「人肉 or ねずみの肉 or 病死した動物の肉 or ゾンビの肉 or ミミズ（この5パターン全て聞いたことがあります）」

複数説が併行あるいは累積して語られていたことに注意しなくてはならない。なお、以上の諸情報に関しては、迂闊にも、何歳あるいは何年頃に聞いたのかを確認していなかった。そこで、同学年とその前後のゼミ卒業生そして在大学生を対象にマック人肉バーガー譚を初めて知った年度について Line や Eメール等を使用して改めて確認を行った。具体例をいくつか示してみよう。

- ・2000～2002年：岐阜県土岐市の小学校で同級生から（1992年生まれの女子）
- ・2001～2003年：三重県多気郡明和町の小学校4年から6年の間に同級生から聞いた（1991年生まれの女子）

- ・2004年前後：静岡県静岡市で小学校高学年から中学生だったころ友人から聞いた（1992年生まれ男子）
- ・2007年：岐阜県大垣市の小学校で6年の時に同級生から聞いた（1996年生まれ男子）
- ・2008年頃：愛知県稲沢市の小学校で同級生から聞いた（1998年生まれ女子）
- ・2010年頃：三重県桑名市の小学校で高学年のころ友人から聞いた（1998年生まれ男子）
- ・2011年：愛知県名古屋市で10歳の時、小学校で同級生から聞いて盛り上がった記憶がある（2001年生まれ女子）

以上の情報から、マック人肉説は、ほぼ2000年以降に語り始められ、1990年代に生まれた小学生たちが高学年時に同級生や友達を通じて拡散・継承してきたことが確認できる。なおも「口承」が主体であったといえるが、インターネットで知ったという例も少なくない。1991年生まれ女子は、「高校生だった2008頃にインターネットの都市伝説サイトで知った」という。注目したいのは次の2例である。

- ⑦「PCを買ってもらいインターネットサーフィンができるようになった2008年頃にネットの掲示板の2ch やまとめサイトで知った。マクロナルドは何個か都市伝説があったので、人肉伝説についても特に違和感なく受け入れた気がする」（1993年生まれ女子 KA さん）
- ⑧「千葉県で社会人になっていたが、2014年か2015年、マックの異物混入事件の際に人肉使用の都市伝説をネットで見て初めて知った」（1991年生まれ男子 YT さん）

⑦は、インターネット環境が都市伝説の受容に大きくかわることを端的に教えてくれる。⑧の「異物混入事件」とは、2014年8月26日から2015年1月3日までに起きた4件の異物（人の歯1件・プラスチック片1件・ビニール片らしき異物2件起）混入事件のことである〔朝日新聞 2015年1月8日〕。「都市伝説」(urban legends) は「同年代の集団のなかで、友達からの又聞きという形で、『友だちの友だち』程度の人たちに『実際に起きたこと』として語られ、「われわれが共通にいただく不安に訴えて、『ひょっとしたら』という形で好奇心を刺激していくものが多い」〔川森 2000:214〕。立派な社会人となっていた YT さんは、実際の事件についてのネット検索に際してたまたま人肉使用の都市伝説に出会ったのであるが、小中学生であったならば、人肉使用を「ひょっとしたら実際に起きた」と考えたかも知れない。

一方で、都市伝説は、尾鰭が付いたり、再生産されがちである。人肉使用の嫌疑はハンバーガーに留まらない。IT さん（1999年生まれ女性）は9歳だった2008年、愛知

県小牧市の小学校で同級生から⑨「マク○ナルドのハンバーガーパティは、ネズミやミミズの肉という噂が主流だったが、チキンナゲットは人肉を使っている」と聞いていたという。また、同年生まれの男子 MD さんは、10歳の小学生だった2009年、⑩「マク○ナルドはハンバーグやナゲットに人肉を使っている」と同級生から聞いている。比較してみると、前者は先行伝承を温存させながら、いわば隙間部分で語り始められ、後者は、先行伝承を塗り替える形になっている。

塗り替えといえば、2015年度入学の女子学生は、⑪「○ックの肉は人の手の肉が入っていると友人から聞いた」と語っている。いつ聞いたのかは確認できないが、「人の手」への特定が注目される。

一度に複数の大学生から人肉バーガー譚を聞くことができたのは2013年であったが、翌2014年の調査以降、M社のマスコットキャラクターであるドナルド・マク○ナルドに関する怖い噂を聞くことになる。

- ⑫「ドナルド（MC）が人を連れさって肉の代りに使う」（2013年入学の女子）
- ⑬「あのピエロをなぐったりすると夜中家にやってくる」（2014年入学の女子）
- ⑭「マ○ドナルドのキャラクターのドナルドは殺人鬼」（2016年入学・1997年生まれの女子）
- ⑮「マク○ナルドの肉は、ドナルドが捕まえた子供の肉であるという都市伝説。（YouTube でそのようなイタズラ動画が投稿されていたため）」（2019年入学の女子）

これらの情報もいつ誰に聞いたのかを確認していなかったのだが、⑭はゼミの卒業生からの情報だったので、2021年5月に再度記憶を語ってもらった。

- ⑭「静岡県静岡市清水区の小学校で高学年の頃（2006年～2008年）、（CMで歌われる）『らんらんー』というドナルドの口癖？が『死ね死ね消えろ』という意味だという噂とセットで殺人鬼説が流行っていた」（1997年生まれの女性 MY さん）

念のため、他の情報にあるような被害者の肉の使用について確認すると、それは聞いておらず、小学校ではネズミやミミズ説を聞いていたとのことである。次の例は、同じくゼミ卒業生で1992年生まれの女性 HH さんからの情報である。

- ⑯「2000～2002年の間に岐阜県土岐市の小学校で同級生から聞いた話では『ドナルドがさらってきた子供を肉にして調理して、死体は店の裏に放置している』という内容だった。しかし、如何せん田舎だといなくなった子供が誰か特定できるため、それは都会の話だと思っていた。当時は、ハッピーセットのCMでドナルドと子

供が遊んでいる CM が流れており、子供ながらにちょっと怖かった。ただし、猫や犬の方が多く語られ、『あそこのマックのごみ箱には猫や犬の骨とか残骸がある』みたいな話とセットで語られていた。人肉は、上級生が言っていたが、人の肉ほどになるとリアリティーがないのでそれで騒いだりはしなかった。犬猫の方がペットで飼っている子もいて『マックはひどい』みたいな流れになっていた」

当時のテレビ CM が子どもを怖がらせる下地を提供していたようである。それにしても、とんでもない冤罪である。とはいえドナルドはけっして孤独ではない。⑰「カーネル・サン〇ースの人形（像？）が夜になると動いて人を喰らう」という伝説を同じく2014年の調査で2013年入学の女子から聞いている。サン〇ースは某大手フライドチキンチェーン店の創業者であるが、この店と商品をめぐっても様々な都市伝説が語られてきた。アメリカ本国では、1970年代以降「ケンタッキー・フライドラット」が頻繁に語られている [ブルンヴァン 1988 : 127-133]。近年の日本では遺伝子組み換えによる4本足や6本足の鶏の使用が有名であるが、最近では人肉説も登場している。2000年生まれの高知県在住の男子学生 YH さんの記憶によれば、⑱「ケン〇ッキーの肉に人肉が使われたことがある」という噂が、2012年、2013年あたりに友人間で語られていたという。

さて、2000年以降に盛んに語られ始めたマック人肉説であるが、これには、散発的ではありながらも先駆けがあったことが確認できる。長野県松本市在住のNさん（1966年生まれの女性）の記憶では、⑲「誰から聞いたかわからないけれど、1985年頃に仲間内の中で、マックに人肉が使われているという噂があって、気持ち悪くて行かなかったという覚えがある」が、「マックが松本にできて間もない頃に珍しさもあった」とのことである<sup>3)</sup>。また、愛知県小牧市在住のHAさん（1998年生まれ）は、マック人肉伝説を1990年代に両親から聞いていたという。両親はかつてどこかで囁かれた話を耳にされたのであろう。

ところで、念のために確認しておきたいが、人肉を一旦切り離しても、M社やK社に都市伝説が集中している。それはなぜだろうか？ 第一に、両社が全国展開、いや世界展開の多店舗型飲食店だということである。都市伝説の伝播・存続には、多くの人々の共通の話題になることが重要である。全国の不特定多数の市民が利用者になりえ、他人事ではなくなるからである。第二は、ハンバーガーもフライドチキンも外来の食品であり、外資系・外来の会社であった。未知の部分が大きく、そこに奇異なことを語っても検証が比較的困難となり、「もしかして」「ひょっとしたら」という思いが働きやすくなる。

### 3. 他の食品における人肉使用譚と事件

人肉バーガー譚を複数聞くことになった2013年度には、同じく2012年入学者を中心とする76名の中から、M社やK社以外にも人肉の使用や人体の一部の混入が語られる都市伝説や噂話を7例（①～⑦）知ることになった。その後を得られた例とともに以下に紹介しておきたい。

- ①「昔（小学生の頃）に友人から缶づめの肉は人肉が使われていると聞き、一時的にトラウマになり食べれなくなった」（2011年入学の男子）
- ②「暴走族の一人が相手を殺した証明にと持ってきた手首をラーメン店のなべに隠したところ、知らなかった店主がそれでダシをとってスープを作り好評だった」（『都市の穴』という本で知りました）」（2012年入学の女子 MM さん<sup>4)</sup>
- ③「うまいラーメン屋（詳細不明）には人骨がまざってる」（2012年入学の女子）
- ④「肉まんから指が出てきた。（〇ーソン）」（2012年入学の女子）
- ⑤「味の素の原材料は人の髪」（2012年入学の女子）
- ⑥「味の素の原料はインド人のかみ」（2012年入学の男子）
- ⑦「ホットドックの中から人の指が出てくる」（2012年入学の男子）
- ⑧「どこの店かは分からないが、ファースト・フード店のホットドッグのソーセージの中から人の指（骨？）が入っていたらしい」（2013年入学の女子）
- ⑨「DL（某ねずみの国）の肉は人肉（中学生の頃同級生から）」（2013年入学の女子）
- ⑩「ウインナーには人肉も入っている。操作ミスで指の肉が入るから」（2013年入学の女子）
- ⑪「人肉ハンバーグ：家庭用ハンバーグを作る工場で作業中に機械に指がはさまってそのままハンバーグの中に指が入ってしまい、そのまま店に出回った」（2013年入学の女子）
- ⑫「カップめんのスープのだしには人間の内臓を使用しているため、同じカップめんでも違う人間の一部を使用しているため味が微妙に異なるらしい」（2013年入学の女子）
- ⑬「13日の金曜日にだどりつくある路地裏の精肉店では人の肉が売り買いされている」（2013年入学の女子）
- ⑭「ある中華料理店で『ぎょうざ一つ』というと、殺人の依頼になるらしい。後に殺された人物の耳がぎょうざの代わりに出るとか」（2013年入学の男子）
- ⑮「あるおすし屋さんでは、ネギトロに人肉を用いているという噂がある。実際にネギトロには複数の赤身魚が混合されているらしい」（2013年入学の男子）
- ⑯「あるところに夫婦でやっているうまいと評判のソーセージ店があった。ある時こ

の夫婦が言い争っているのを聞いた人がいた。その翌日、店頭で2mのソーセージが並べられ、夫が姿を消した。という話しを聞いたことがある」(2014年入学の女子)

- ⑰「ある肉屋の出すソーセージは人肉でできている」(2014年入学の男子)
- ⑱「店で使われている肉はほとんどが人間の肉」(2014年入学の女子)
- ⑲「コカ・コー○の材料は人！」(2014年入学の男子)
- ⑳「ペ○シの人口甘味料には墮胎した胎児を搗り潰したものを使っている。→ネットに書いてあった」(2015年入学者)
- ㉑「某ファミリーレストランでは人肉を使っていた」(2015年入学者)
- ㉒「大阪の「□ッパ-□ンチ」という店は人肉を提供していた」(2015年入学の男子)
- ㉓「殺した人の骨を煮込んで作ったスープを使ったラーメンを屋台で売っていたという噂」(2017年入学の男子)
- ㉔「あるラーメン店でぎょうざを注文すると人の耳のものがでてる」(2017年入学の女子)
- ㉕「カップめんのスープのだしには解剖された人間の臓器が使われている」(2017年入学の女子)
- ㉖「某ラーメン店はギョウザを2つ注文すると、人間の揚げた耳が出されるらしい」(2018年入学の男子)

以上、缶詰 ラーメン、肉まん、ホットドッグ、ソーセージ、ウインナー、ハンバーグ、カップ麺、餃子、ねぎとろ、コーラと、身近な食品や料理が並んでおり、庶民にとっては他人事では済まされない。①の学生は、気の毒にもトラウマになっていたというが、刺激の大きさは都市伝説の値打ちの一つでもある。

さらに注意したいのは、実在の人の指の混入事故に影響されたと考えられる例(④⑦⑧⑩⑪⑲)が少なくないことである。前節の⑪「○ックの肉は人の手の肉が入っている」は、上記⑪の「人肉ハンバーグ」と同根である可能性が高い。全国販売かつ安価で有名な某ハンバーグの指先混入事故が実際に起こっているし、1989年には某大手製パン会社のジャムパンへの指先混入事故[朝日新聞 1989年9月10日]、2016年には、某ラーメンチェーン店の某店舗で、ラーメンのスープの中から仕込み中に誤って切断された親指の先端部分が見つかったという事件も起こっている[産経ニュース 2016年10月26日]。異物混入全体を見れば、M社の例についても先述したが、かなりの頻度で事故が繰り返されているのである。

段ボールの混入については、筆者は2013年に初めて㉗「マックの肉にはダンボールが入っている」との情報を得、以後、2014年、2019年にいずれも大学2年生より1例ずつ聞いている。これは2007年のある「事件」の影響と考えられる。中国の話だが、



2007年、「北京テレビ」は北京の露店でひき肉に段ボールを混ぜた「段ボール肉まん」が販売されていたと報道し、日本でもNHKが取り上げている。その後、それが制作スタッフによる“やらせ”だったことが判明したという [東京新聞 2007年7月19日]。なんとも人騒がせな話である。ところが、2020年に一人の2年生が記したのは、<sup>28</sup>「某マックの牛肉はダンボール」であった。段ボールは混入から主原料へと進化しているのである。

食品に関するマスメディアの影響は非常に大きいものといえる。ブルンヴァンは、食品への混ぜ物や細工に関してのマスメディアの報告が、「次から次へと逆にフォークロアの回路へ還流し、影響を与える」ことをいちやく指摘している。ただし、彼は、そうした報告は「これ自体、たいていアテにならないのだが」と付記している [ブルンヴァン 1988 : 128]。

<sup>2</sup><sup>3</sup><sup>4</sup><sup>16</sup>には殺人が語られるが、とくに<sup>2</sup>が下敷きとしているのは、1978年の「暴力団員バラバラ“手首ラーメン”事件」であろう [事件・犯罪研究会・村野薫編 2002 : 737-738]。なお、日本では食人を目的とする殺人事件も度々発生している。次節で述べるペコちゃんによる母親に対するカニバリズムは戦争中の飢餓が背景として語られるが、戦争末期の1945年3月、群馬県北甘楽郡で起こった「人肉食事件」は次のように悲惨なものであった。

亡妻との間に四子ある男性に、一子を連れ子として嫁いだ32歳の継母〇〇子は、夫の怠惰もあり、極貧の生活を送っていた。1945年3月26日、食物を全く欠くなかで、痩せ衰えていた継子□□17歳が動く気力もなく座っているのを目撃し殺害して子どもたちと自身の食用に供することを決意した。敷居に頭部を押し当て窒息死させて後、鋸と包丁を用いて切断し、3日間にわたり、手足、胸の臓物等を囲炉裏において鍋で煮たうえ、「之を山羊の肉なりと称して」3児と共に食した。<sup>5)</sup>

言葉を失うほど陰惨な事件であるが、「山羊の肉なりと称して」の部分が注目される。都市伝説の人肉バーガーも「牛の肉と称して」いることが前提である。繰り返しになるが、都市伝説は、「実際に起きたこと」のように語られる。内容は異様であるものの、「ひょっとしたら」という思いが伝承の基盤にある。そうした中、実在の事件は、都市伝説を「ひょっとしたら」から「十分ありうる」方向に導きうるのである。

#### 4. ママの味

食品における人肉使用譚を多数聞くことになった2013年度には、同じく2012年入学者を中心とする76名の回答から1例のみだが、「ミルキーはママの味」に関する都市伝説をはじめ聞くことになった。<sup>1</sup>「不〇家のペコちゃんが舌を出してなめているのは

顔についてお母さんの血で、そのため『ミルクィーはママの味』という」(2012年入学の女子)。必ずしもカニバリズムと呼べない内容であったが、翌2014年には、2013年入学者を中心とする60名の中から次のような類話3例を知ることになった。

- ②「『ミルクィーはママの味』というのは、ママの血か肉が入っているという意味だというようなことを聞いたことがあったような気がします」(2013年入学の女子)
- ③「『ミルクィーはママの味』とはペコちゃんが、戦時中に飢えてお母さんを食べた味。ペコちゃんが舌で隠しているのはお母さんの血」(2013年入学の男子)
- ④「不〇家の『ミ〇キーはママの味』と言う台詞はママを殺してそのママの死体をキャンディに使ったからという噂。※実際の商品は大丈夫です」(2013年入学の男子)

いずれも、「ミルクィーはママの味」の解釈に関するものだが、②は①と同様に、いまだカニバリズムとは呼べないものの、③と④は明らかなカニバリズムを示している。③は、食料不足下での母子間のカニバリズムを語るもので、④は、ミルクィーの味をめぐるストレートな解釈だが、母子間でカニバリズムが行われたかは不明である。ここでカニバリズムを無意識のうちに強いられるのは、上述の人肉使用譚と同様に顧客たちということになる。

次の事例は、2014年入学者を中心とする2015年度の回答者56名から得られた4例中の2例である。

- ⑤「不〇家のミルクィーは『ミルクィーはママの味』というCM(?)で知られているが、昔、食べ物がない母が子に自分の肉を食べさせたという話がある。文字通り『ママの味』である」(2013年入学の女子)
- ⑥「ミルクィーのペコちゃんは本当は恐ろしい少女だった。ペコちゃんのモデルとなった少女は、戦争中、母親と二人暮らしで、食料難で苦しむ中、あまりにも空腹で母は自分の腕を切り落とした。どうにもお腹が減った少女はその腕を食べたと言われており、その味が忘れられなくなり、ついには自らの手で母を殺して食べてしまった。ペコちゃんが舌を出しているのは、その時の血を舐めたものだと言われる」(2014年入学の女子)

⑤では母親の自己犠牲が語られ、⑥は残酷で詳細な記述となっている。戦争中の食糧難という背景はその後得た多数の事例に語り継がれる。この説明はある意味で合理的であり、聞き手を「ありえたこと」へと導く効果をもつ。前節の最後に戦時下の1945年3月に起きた困窮と食料不足に基づく「人肉食事件」を紹介したが、読み比べると、どちらが実話かわからなくなる。都市伝説の巧妙な語り方がここにあるといえよう。伝承

の過程で微妙な変化が生じるのは都市伝説の常であるが、以下、その後を得られた事例の一部を紹介したい。

- ⑦「ペコちゃんのモデルの女の子は戦時中の時代の子である。飢えている女の子にその子の母親が自分の血を与えたことがありそれがミルクキーの味のもとになっている」(2019年入学の女子)

次の事例では、特徴的なペコちゃんの「舌」が見事に強調されている。

- ⑧「ペコちゃんが舌を出しているのは、その昔、戦争で食料がなく、貧困だったときに、可哀想に想った母親がペコちゃんに自分の舌を食べさせ、ペコちゃんはその味が忘れられなく母親の肉を喰いつくして最後にペロッと舌を出したという噂」(2018年入学の男子)

この事例では、戦時下1945年3月の「人肉食事件」と同様に、食料不足に貧困が加わっている。次の⑨は、貧困のみが背景とされているが、もしかすると、子どもの貧困が進行した世相の反映と考えることができるかも知れない。日本における20歳未満の貧困率は、1985年以降2012年まで急増している [阿部 2018]。

- ⑨「ペコちゃんは貧乏で飢えをしのぐためにお母さんを食べてしまった。そして周りの人が心配して見にきた際ほっぺの血がばれないように舌を出した」(2018年入学の男子)

一方で、1例のみだが、震災時の食料不足を語る事例もある。1998年生まれの子供提供の事例である。もちろん事実無根だが、2011年の東日本大震災の印象が当時小学校卒業間もない彼女たちに影響を与えていたのだろうか。

- ⑩「ミルクキーのペコちゃんは震災のとき食べるものがなくてお母さんの腕を食べた。その血をペロでかくして、ママの味はそういう意味である」

「ママの味」の説明に関しては、次のような合理化も行われている。

- ⑪「ミルクキーはママの味といわれるのは、ペコちゃんがお母さんを食べた時の味とミルクキーの味が同じだったからママの味といわれるようになった」(2018年入学の男子)

- ⑫「ママの味というのはペ○ちゃんが本当にママを食べてしまって、そのママの味がミ○キーだ、という内容です」(2019年入学の女子)

ペコちゃんの舌については、いずれも2018年入学の女子たちが次のように説明している。

- ⑬「お母さんの返り血を舐めてる」  
⑭「お母さんの体の肉を食べて、満足して舌を出したから」

⑬は、母親を不意打ちしたのであろうか？ 一方、⑭は別の意味で不気味といえよう。以上、母子関係が常に取り上げられるが、父親が不在とは限らない。

- ⑮「ペコちゃんが舌を出してるのは、お父さんとお母さんを食べた血？肉？を隠すため」(2018年入学の女子)  
⑯「ミルクにはパパの味が混ざっている」(2012年入学の男子)

⑮までは全例が族内食人 (endocannibalism) といえ、⑯は食人については不問のまま、どこかユーモラスである。次の3例は、食べた相手が特定されず、潜在的な食人鬼あるいは殺人鬼としてのペコちゃんが描かれているかのようである。

- ⑰「ペコちゃんは人を食べてそのおいしさが忘れられずにずっと舌なめずりをしているから舌が出ている」(2018年入学の女子)  
⑱「ペコちゃんは返り血をかくすために舌を出している」(2018年入学の女子)  
⑲「不二家のペコちゃんは食人をして、口についた血を舌で舐めている」(2019年入学の男子)

ペコちゃんは、M社のドナルドやK社のカーネル像とともに多店舗型店舗の店先を飾ってきたが、語り手は、都市伝説上でも肩を並べさせようとしているのだろうか。小学生たちは、静物を動かすのが大好きである。理科室の人体模型、音楽室の肖像画、校庭の二宮金次郎像また然りである。

ここで、ペコちゃん母子カニバリズム譚の発生時期について考えてみたい。上述の情報のはほとんどは、いつ誰から聞いたのかを確認していなかったもので、人肉バーガー譚の確認と併せて、ゼミの卒業生たちに情報を求めたところ、1992年生まれの女性HHさんの記憶による2003年から2004年くらいがこの話の初出となる。その後、生年に応じて、2006年、2007年、2008年頃という回答が続くが、小学校の友人や同級生から聞いたと

いう例とともに、インターネットで知ったという例や、それについて教室で語り合うことも少なくなかったようである。回答者の多くは、この話を人肉バーガー譚とほぼ同時期に聞いており、中にはこれら2話を同じ同級生から聞いたという例もある。1991年名古屋生まれの女性NYさんは、小中学校を通じて都市伝説として聞くことはなかったが、2008年前後、「高校生の頃にマック人肉話と共にインターネットの都市伝説サイトで知った」と記憶している。1991年三重県生まれの女性HYさんも同様で、⑳『『ミルクィーはママの味』に対してふざけて言っていた子はいたと思いますが、都市伝説にあるような細かい話ではなかった」と回想している。

ここで気になるのが「ふざけて」という指摘である。「ミルクィーはママの味」は何故おふざけの対象になったのだろうか？ 中野弘美は、このキャッチコピーのメタファーに関して、『『ママの味』とはどんな味だろう？ 広告の送り手は母乳を想定しているらしいが、受け取り方は千差万別であろう」と指摘している [中野 2102: 106]。とくに子どもたちには、メタファーの読解よりも、「肉の味」「ミルクの味」と同様、直截的な理解の方が容易であろう<sup>6)</sup>。すなわち、「ママ」は字義通りに食用あるいはミルクィー同様口に含む対象として理解される。奇異でありながらも明瞭な解釈である。しかも、メタファーとしての「ママの味」は「おふくろの味」とともに、近年のジェンダー平等の視点からは、ジェンダーバイアスを帯びた表現とも批判されかねない。直截的解釈はこの点でもバイアスフリーとなり有利である。とはいえ、ママは食用ではない。小学生たちがそこに違和感や疑問を覚え、おふざけの対象としたことは十分理解できる。さらに、疑問は解消されなくてはならず、ママを食べた理由が必要となり後付けされた。このように、おふざけの感覚の延長線上に都市伝説が成立したと考えることができまいだろうか。

## 5. カニバリズムの諸類型

ここで、実際のカニバリズムに目を向けてみよう。カニバリズムの形態や目的は様々であり、分類法も多様であるが、友枝啓泰は、動機に基づき、①人肉嗜好としての食人、②宗教・呪術的な理由による食人、③食糧欠乏状態で容認される食人（番号は蛸島）と3分類を行っている [友枝 1987: 369]。Ivan Bradyも同じく3類型を示すが、①飢餓に際し親族に敬虔で自己犠牲的に食糧を提供する良心的行為、②死した親族との連続性を示す儀礼的な身体の部分的摂取、③戦争における敵の捕獲と摂取（番号は蛸島）という分類法である [Brady 1996: 163]。

一方、Shirley Lindenbaumは以下のような9類型を示している（番号は蛸島）。①生存のための食人、②精神病理的食人、③族内食人、④族外食人、⑤医療的食人、⑥自食現象、⑦骨灰食人、⑧生贄的食人、⑨無意識裏の食人。友枝やBradyの分類に比して細やかな分類といえそうだが、これらの9表現には注意と補足が必要である。例えば、

Lindenbaum は、③族内食人 (endocannibalism) を、葬儀に伴い、遺体のすべてあるいは一部を愛情による行為または集団の更新や再生を目的として摂取するものにほぼ限定している。一方の④族外食人 (exocannibalism) は、攻撃的行為としてしばしば戦争に際して行われるものに限られる [Lindenbaum 2004: 477-479]。③と④の定義はいくつかの先行研究をほぼ踏襲するものではあるが、⑦の骨灰食人も、ほとんどの場合は③に含まれることになり、明瞭な分類法とは呼びがたい面がある。筆者は、「族内食人」「族外食人」を字義通りに、食う者と食われる者が一定集団内にあるか否かという基準のみでの分類として使用し<sup>7)</sup>、目的に応じて他の類型との組み合わせにより細分していく方が混乱は少ないと考える。

さて、現代日本の都市伝説で語られるカニバリズムであるが、人肉バーガー譚や3節で挙げた人肉使用譚のほとんどは、Lindenbaum が最後に挙げる「⑨無意識裏の食人」に相当しよう。食べる本人には、それが人肉だと知らされていないのである。

一方のペコちゃんによる母子間カニバリズムは、広義での「族内食人」ではあるが、葬儀とは無関係であり、Lindenbaum による限定的なそれには当てはまらない。彼女の分類法では「①生存のための食人」に属することになる。より正確には「生存のための族内食人」と呼べるが、最も馴染むのは、Brady の「①飢餓に際して親族に敬虔で自己犠牲的に食糧を提供する良心的行為」である。この類型は、主語が食糧提供者すなわち食される側である点上記諸類型の中でも異質である。しかし、上述のペコちゃん譚においても、ママは自分の肉や血や舌を食べさせており、ペコちゃんとともに重要な主格となっていたことに注意すべきであろう。

## 6. 昔話上の類話と母子間カニバリズム

人肉バーガー譚その他多数の多店舗型飲食店に多い「⑨無意識裏の食人」であるが、同じ要素を示す昔話が存在する。「かちかち山」においては、狸は、爺に、狸汁といつわって婆汁を食べさせている [鳥越 1994: 206]。東北・北陸地方の「瓜子姫」では、アマノジャクが姫を殺して、爺婆に瓜姫汁を食わせている [中島 1994: 121]。

一方、同様にカニバリズムを描く「子供の肝」は、「子どもを犠牲にして親の生命を救おうとした夫婦の孝行譚」であり、子どもの生き胆を祖父母に提供しようとする [遠藤 1994: 348]。以上は、いずれも未遂を含め、近親間での殺人や広義での族内食人を描いているが、この点では、ペコちゃんに通ずることになる。ただし、ペコちゃんの場合は尊属殺人となり、「子供の肝」では反対に卑属殺人となっている。とはいえ「子供の肝」型の昔話を知る若者は少ないだろう。むしろ白雪姫の継母による娘の殺人委嘱と臓器のカニバリズム未遂はより有名であろうか。

一方、ドナルドやカーネル伝説は、不特定多数の非親族を襲うという点で日本の「山姥」に通じるものがあるが、性別は異なる。とはいえ、4の⑰⑱⑲などを見ると、今後

ペコちゃんが山姥のように変化していく可能性は否定できない。

そのペコちゃんによる母子間カニバリズムであるが、「目の玉型」と呼ばれる蛇女房譚との比較が許されそうである<sup>8)</sup>。蛇が人間男性と結婚し、子を儲けるが、夫は禁を破り、赤子を抱いてとぐろを巻く蛇の姿を目撃する。妻は夫に目玉を一つ与え、それを赤子に舐めさせるよう言い残して去っていく。子は、母親の目玉を舐めて成長する。目玉は、だんだん小さくなり、しゃぶっても何も出なくなるという例や、目の玉を「なめさせると乳が出る」と説明する例もある〔稲田・小澤 1980：27-31〕。その後もう一つの目玉を与え盲目になるという母親の自己犠牲が強調される例もあり、ペコちゃん譚もその路線にある。さらにいずれの例でも蛇は生きながらにして目を提供している。ペコちゃん譚も最初は、母親が生きながら、血 (⑦)・舌 (⑧)・腕 (⑥⑩) を与えており、「目の玉型」と同様に生体間カニバリズムと呼ぶことができよう。

考えてみれば、爬虫類による哺乳類への「授乳」はきわめて興味深い現象である。覗き見の禁忌はそれゆえにも強かったと考えられるが、そもそも授乳はカニバリズムとは無縁ではない。cannibalism は生物学では「共食い」と訳され、動物学者であり作家でもあるビル・シャットは、これを「ある生物種の個体と同じ種の別の個体の全体または一部を摂取する行為」と定義するが、授乳は、爪噛みの行為とともに「判断がむずかしいグレーゾーンの行動」とみることができるという〔シャット 2017：29-30〕。ここで、「ミルキー」(milky) と「ママの味」を再考してみると、milk がミルキーの原料である「牛乳」であるとともに「母乳」でもあることが大きな意味をもつようである。「乳」には「乳房」の意味もあるが〔新村編 2018：1870〕、乳幼児にとっては、母乳やそれを分泌する乳房はママの象徴でもある。「ママの味」とは本来「母乳によく似た牛乳の味」を意味していたのであろう。いまさらながらではあるが、不二家側の説明を確認してみよう。同社ホームページ「お客様窓口」のFAQの1つが「ミルキーはママの味」の意味を説明している。

「ミルキーは北海道の厳選されたしぼりたてのミルクから作られた濃厚なれん乳を使って作られています。このお母さんの愛情や母乳のなつかしさをイメージしたキャッチフレーズで、発売当時（1951年（昭和26年））から親しまれています」  
〔<https://www.fujiya-peko.co.jp/contact/faq/faq01/s005.html>（2021年5月9日閲覧）〕

「ママの味」が母乳に収斂されるのであれば、「パパの味」は出番を失うことになる。そして、改めて、血液の変形でもある母乳の摂取を広義でのカニバリズム行為と見るならば、ペコちゃんに限らずヒトはみな実際にママを食べていたのである。ここにも、この都市伝説成立のもう一つの基盤があったと見ることはできないだろうか。

## 7. 都市伝説におけるカニバリズム的要素浮揚の背景

都市伝説は新たな刺激を求めてバリエーションを生んでいく。M社の人肉バーガー譚をめぐっては、先行する素材として、イヌ、ネコ、ミミズ、ネズミがあった。多数の動物の中でイヌ、ネコ、ネズミはいずれもヒトにとってもっとも身近な哺乳類たちであり、とくにペットとなるイヌとネコは食用にはもっとも適さない動物であった。2の⑩におけるHHさんの回想では、ペットを飼っている子どもによるM社への批判が語られていた。

これらの身近な動物が都市伝説上に出揃った時点で、より大きな刺激が求められたはずだが、それにはより身近な動物が相応しかった。ヒトにとってペット以上に身近な動物はヒトしかない。さらに、食の禁忌は、しばしば性の禁忌と類比的に論じられてきた。性の禁忌の大部分を占めるのが、incest taboo すなわち近親相姦禁忌である<sup>9)</sup>。E. Leach は、英語母語話者にとっての人間間の距離と人間と動物との距離とのアナロジーを論じている。距離に応じて前者においては性的関係、後者では食用の可否が決まってくるという。性の領域／食の領域では、遠近両端すなわち「遠隔地の人／野獣」と「兄弟姉妹／ペット」はともに「結婚不可能／食用不可能」となり、「性関係・結婚可能／食用可能」となるのは中間のカテゴリーに属する人々や動物ということになる [Leach 1979: 159-160]。当然のことながら、遠隔地の野獣はヒトとともに不可食である。ハンバーガーパテにおけるコアラやカンガルーがヒトとほぼ同時期に語られ始めたことはこの点で興味深い。

Leach はカニバリズムについては言及していないが、食の領域に関して、ヒトを動物のカテゴリーに加えた場合、もっとも強い食用禁忌が生じるのは当然といえよう。性の領域に関しては、ペコちゃんとママとは同性であるので、二人の間に incest taboo はもともと及びがたい。しかし、族内食人の中でも近親中の近親であることは異様さを際立たせる。

カニバリズムは、特殊な条件下で習慣的に許容されていた場合を除いて、非常に強い嫌悪の対象となる。それゆえにこそ、都市伝説においては極めて刺激的な話題となる。しかし、都市伝説の生存戦略上、刺激と嫌悪感は上手にコントロールされなくてはならない。高校時代に、M社の人肉伝説をネット検索で知った1993生まれのKAさんは、すでに同社に関して「何個か都市伝説があったので、人肉伝説についても特に違和感なく受け入れた気がする」と語っている（2の⑦）。刺激は追加されながらもその繰り返しや環境の変化、また年齢が増すとともに聞き手は馴化していくようである。そうした中でゾンビ（2の⑥）などは新たな刺激を求めてのヒトの加工といえよう。

カニバリズムは、大方の現代人とは無縁となって久しいが<sup>10)</sup>、都市伝説の中ではゾンビのごとく再生しているようである。山田仁史は、カニバリズムと関連深い高木敏雄の



『人身御供論』の文庫版解説において、「人体がささげられる場面は、形を変えて生き残ってはいないだろうか」と問いかけ、臓器移植とマンガ界という2つの場面を指摘している。山田による言及はないが、都市伝説をもう一つの場面に加えることができるだろう。

臓器移植とマンガ、さらにカニバリズムをつなぐものにアンパンマンがある。アンパンマンは空腹の子どもたちに自分の顔の一部を食べさせている。出口顕は「アンパンマンを臓器移植の物語とみなすことができる」と述べ、アンパンマンのイメージを中世絵画におけるイエス・キリスト像や聖母マリア像と比較する。磔にされたキリストの血は飲み物として聖杯に入れられ、他者に「生きる糧」として与えられるが、その姿は、赤子に乳を含ませる聖母像に重ね合わされていたのである [出口 2001: 10-16]。ちなみに、先の Lindenbaum は、聖体拝領を、アズテクの事例でよく知られる⑧生贄的食人 (sacrificial cannibalism) の象徴的延長と呼んでいる [Lindenbaum 2004: 479]。

アンパンマンは厳密にはヒトとはいえないが、その顔の食用はきわめてカニバリズム的な行為といえよう。上述の都市伝説の語り手たちは、アンパンマン世代である。アンパンマンは1973年に絵本として誕生し、1988年にテレビアニメとして放映が開始されている。幸いにもアンパンマンの顔は補充可能であり、カニバリズムは美化されている。こうしたシーンの繰り返しが読者や視聴者が抱くはずのカニバリズムへの嫌悪感を稀釈してきたとはいえないだろうか。

山田がマンガ界に関して引用しているのが、2018年8月21日の『読売新聞』の記事である。石田汗太編集委員は「2010年代のマンガ界で大流行しているテーマが『食う／食われる』である。食物連鎖の頂点にいるはずの人間が、さらに強い存在に、なすすべなく食糧にされる作品が実に多い」と指摘している。そこに挙げられる作品は、『進撃の巨人』（諫山創作、2009年連載開始）『東京喰種（トーキョーグール）』（石田スイ作、2011年連載開始）などであるが、特に後者は「他者を食わねば、自分が生き残れない」という時代の空気を鮮烈にすくい取っていると指摘している [石田 2018]。

この記事には言及がないが、現在大人気の『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴、2016年連載開始）を含めた3作品においては、いずれも元人間あるいは喰種の臓器を移植された人間による食人が描かれているという<sup>11)</sup>。これらの描写が、読者たちにカニバリズムを身近に感じさせているとはいえないだろうか。ただし、上述のカニバリズムを描く都市伝説が語られ始めたのは、これら3作品の連載開始前である。

とはいえ、比喩的な意味での「食うか食われる」あるいは「弱肉強食」は、これらの作品に先行して描かれていた。梅川正美は著書『昔話とアニメの中の政治学』において「弱肉強食の個人主義」を描く作品として『カイジ』（福本伸行原作）と『ハゲタカ』（真山仁原作）を紹介している。前者は、勝ち組、負け組が二分され、金持ちが暴力団まがいの違法な暴力と詐欺によって、貧しい人を食い物にするという話であり、後者

は、証券取引において行われる、だまし、だまされる話だという。後者のテレビドラマ化は2007年、映画化は2009年とのことであるが、前者は、ドラマ化・映画化に先立ち、1996年に『週刊ヤングマガジン』に連載が開始されヒットを繰り返していた [梅川 2019 : 24-37]。『カイジ』に関しては、都市伝説上でカニバリズムを語る年代のほぼ誰もが知る作品である。「他者を食わねば、自分が生き残れない」というカニバリズムを連想させる空気はかなりの期間にわたって滞留し続けてきたのである。

## まとめ

以上、人肉バーガー譚やペコちゃん母子譚を中心とするカニバリズム的要素を含む都市伝説について考えてきた。これらは2000年以降に急増し、当時の小学高学年児童を中心に口承で伝えられていたが、同時に図書雑誌やインターネット、特に後者を通じたネットロアが、他の年齢層の間にも拡大し、さらには再度口承されることも確認できた。都市伝説は新たな刺激を加えて継承・改変・増殖していくが、食品をめぐる都市伝説においては、刺激の度合いは嫌悪感の度合いに直結している。バーガー譚については、種々の動物が先行しており、ペットになりうるイヌやネコが食材となることには強い嫌悪感が伴った。それらよりなおヒトとの距離の近いヒトは食材には最もなりがたい動物であり、都市伝説上の刺激はほぼ頂点に達したことになる。実際にヒトが食材になることは考えがたいが、実在の異物混入事件や殺人事件を考えた場合、「まさか」は「ありうる」に転じる。これらに関して報道の力は大きいですが、マスメディアはニュースだけを伝えているわけではない。近年、都市伝説を面白おかしく取り上げる番組も増えている。これらの情報が「逆にフォークロアの回路へ還流し、影響を与え」ているのである [ブルンヴァン 1988 : 128]。

なお、ペコちゃん母子譚のキーワードであった「ママの味」はもともと誤解を招きやすい表現であった。不明瞭な表現には、奇異でありながらも明瞭な解釈が求められた。そこに違和感が残るが、戦時下の飢餓という合理化が加わり、「ありうる」へ転じるのである。さらに、現在は、世相を反映してか、社会には「食うか食われる」かの空気が漂っている。そうした空気はいくつものマンガやアニメによってすくい取られ、具体的なカニバリズムの場面が頻出する。さらに、誰もが知るアンパンマンでは、尊いカニバリズムが繰り返されている。こうした作品群がカニバリズムと若者との距離を縮めてきたといえよう。以上のように、現代の都市伝説におけるカニバリズム的要素は出現すべくして出現したと言ってよいように考えられる。

## おわりに

本稿が依拠した多くの資料は、過去の講義受講者やゼミの卒業生・在学生の協力によって得られたものである。貴重な情報と協力に対し、心より御礼を申し上げたい。な

お、テーマ上、内容や表現で読者や協力者に不快な思いをさせてしまった場面もあったかと想像される。最後に、都市伝説にカニバリズムがほとんど登場しなかった2004年度に得られた、ほほえましい都市伝説を挙げ、口直しとしていただきたい。

「お菓子のミルクキーの包装紙にはペコちゃんの顔が印刷してある。その顔がきれいだしなくて、丸々10コあれば、良い事がおきるらしい」（2003年入学の女子）

## 注

- 1) 例えば、2001年前後はミミズ説が主流となっていたが、愛知県長久手市の小学校では猫説がなお語られていた。一方、全国的には後発と考えられるネズミ説は岐阜市内の小学校で1979年か1980年頃すでに噂されていたという。
- 2) 『都市の穴』は「さる大手ハンバーガーチェーン」に関し、ミミズ・ヌートリア説にカピバラ説を加えている [木原・市ヶ谷・岡島 2001 : 85]。
- 3) 2021年5月3日、子息のNY氏による聞き取りと情報提供による。
- 4) 上述のマック、ヌートリア説もこの学生から提供してもらった。ただし、『都市の穴』の記載を確認すると「暴走族」ではなく「チンピラ」とある [木原・市ヶ谷・岡島 2001 : 101]。MMさんはさらに「ケン○ッキーは秘密で四本足の鳥を作っている」という情報を提供してくれたが、これも同書から得たものだという。
- 5) 礪川全次編集のアンソロジーに採録された『徳川・明治・大正・昭和 著名裁判録(1948)の「人肉食事件」の記載 [礪川 1997 : 343-347] を筆者要約。
- 6) 筆者が東京都江東区の学習塾で講師をしていた1985年頃、小学生から謎々を聞かされた。「ペコちゃん一家がファミリーレストランに行きました。鰻フライが運ばれてきましたが、誰の注文だったでしょう？ 答えはママの鰻」。語呂合わせで「あじ」の意味が変換されているが、小学生には「ママの味」というメタファーよりも「鰻」が想像しやすかったのかも知れない。
- 7) この分類法では、すべてのカニバリズムの事例は「族内」と「族外」のいずれかに二分されることになる。本稿においては、「広義での族内食人」などと表現し、さしあたっての混乱を避けたいと考える。
- 8) 水木しげるの鬼太郎の先行作品となる伊藤正美作「墓場奇太郎」にも母子間カニバリズムが認められ、筆者は同じく「目の玉型」との比較を行っている [蛸島 2019 : 49-50]。
- 9) 近親相姦禁忌の「近親」は生物学的意味での近親を指すとは限らないし、その範囲は社会によって大きく異なる。
- 10) 日本でも「骨かみ」「骨こぶり」などと呼ばれる葬儀における食屍習俗が豊かに伝承されていた [国分 1970 : 448-453, 飯島 1984等]。
- 11) 実は、3作品とも筆者未見であるが、内容については、ゼミ2019年度卒業生の増田優菜さんより教示を受けた。

## 引用文献

〈和文〉

朝日新聞 1989 「ジャムパンに切断した指先：『中村屋』で作業事故」『朝日新聞』1989年9

- 月10日朝刊  
朝日新聞 2015 「異物混入、マックに打撃 期限切れ鶏肉に続き」『朝日新聞』2015年1月8日朝刊
- 阿部彩 (2018) 「相対的貧困率の長期的動向：1985-2015」科学研究費助成事業（科学研究費補助金 基盤研究(B)）「「貧困学」のフロンティアを構築する研究」報告書 ※内閣府男女共同参画局 (gender.go.jp) HP より2021年5月7日閲覧
- 飯島吉晴 1984 「骨こぶり習俗」『日本民俗学』154：6-14
- 石田汗太 2018 「時代の空気 すくい取る」『読売新聞』2018年8月21日朝刊
- 稲田浩二・小澤俊夫 1980 『日本昔話通観』第24巻 長崎・熊本・宮崎 同朋舎出版
- 梅川正美 2019 『昔話とアニメの中の政治学』成文堂
- 遠藤庄治 1994 「子供の肝」稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂：348-349
- カプフェレ, J.-N. 著 古田幸男訳 1988 『うわさ：もっとも古いメディア』法政大学出版社
- 川森博司 2004 「都市伝説」福田アジオ他編『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館：213-214
- 木原浩勝・市ヶ谷ハジメ・岡島正晃 2001 『都市の穴』双葉社
- 礪川全次 1997 『人喰いの民俗学 (歴史民俗学資料叢書)』批評社
- 国分直一 1970 『日本民族文化の研究』慶友社
- 事件・犯罪研究会・村野薫編 2002 『明治・大正・昭和・平成 事件・犯罪大事典』東京法経学院出版
- シャット, ビル著 藤井美佐子訳 2017 『共食いの博物誌：動物から人間まで』太田出版
- 新村出編 2018 『広辞苑』第七版 岩波書店
- 出口顕 2001 『臓器は「商品」か：移植される心』講談社現代新書
- 友枝啓泰 1987 「食人俗」石川栄吉・大林太良・佐々木高明・梅棹忠夫・蒲生正男・祖父江孝男編『文化人類学事典』弘文堂：368-369
- 蛸島直 2019 「もう一人の鬼太郎とその原像：伊藤正美作「墓場奇太郎」をめぐる」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第34号 愛知学院大学人間文化研究所：41-61
- 東京新聞 2007 「『段ボール肉まん、やらせ』中国 北京のテレビ局が謝罪」『東京新聞』2007年7月19日朝刊
- 鳥越明子 1994 「かちかち山」稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂：206-207
- 中島恵子 1994 「瓜子姫」稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂：121-123
- 中野弘美 2102 「広告の記号論」『横浜経営研究』33巻3号 横浜経営学会：95-113
- ブルンヴァン, ジャン・ハロルド著 大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦訳 1988 (1981) 『消えるヒッチハイカー：都市の想像力のアメリカ』新宿書房
- 山田仁史 2018 「文庫版解説 ささげられる人体」高木敏雄『人身御供論』ちくま学芸文庫：287-299
- <英文>
- Brady, Ivan 1996 Cannibalism *Encyclopedia of Cultural Anthropology* Vol. 1 Henry Holt and Company: 163-167
- Leach, E. R. 1979 (1964) Anthropological Aspect of Language: Animal Categories and Verbal Abuse in Lessa & Vogt (eds.) *Reader in Comparative Religion: An Anthropological Approach (Fourth Edition)* Harper&Row: 153-166
- Lindenbaum, Shirley 2004 Thinking about Cannibalism *Annual Review of Anthropology* Vol. 33 Annual Reviews: 475-498